

## 新刊 Book Reviews

□松谷 茂：打って出る 京都府立植物園 A5. 159 pp. 2011. 淡交社. ¥1,600 + 税. ISBN 978-4-473-03758-9.

1923年に開園した京都府立植物園は、大東亜戦争敗戦の結果、米軍家族住宅として接收され、1959年に返還されたときにはすっかり荒廃していた。整備の結果、再発足したのは1961年である。著者が京都府林務課から同園に赴任したのは1995年。以後2010年に園長として定年を迎えるまで、育成、展示、行事などの活性化について、現場職員と積極的に交流して工夫し、入場者数の大幅な増加を達成した。そして、その栽培・管理技術は国際的に評価され、草花の新品種の展示場として認定されるまでになった。本書はそういう体験を率直に、かつ楽しそうに語っている。私にはできそうもないことだが、なにやら「俺もやればできる」と思わせる文章で、元気づけられる。

(金井弘夫 H. KANAI)

□塚原東吾(編)：科学機器の歴史・望遠鏡と顕微鏡。イタリア・オランダ・フランスとアカデミー B6. 194 pp. 2015. 日本評論社. ¥2,600 + 税. ISBN 978-4-535-78792-6.

神戸大学の科学史教室で続けられてきた研究会の中間まとめ。塚原東吾(科学機器の歴史)、三浦伸夫(数学器具としての比例尺の成立と伝搬)、中島秀人(フックの科学的業績と実験機器の技術的起源)、塚原東吾(17～18世紀オランダ科学における望遠鏡・顕微鏡・科学機器。エージェントとしてのオランダ科学)、隠岐さや香(望遠鏡つき四分儀と子午線測定の歴史。地図作成からメートル法まで)、平岡隆二(望遠鏡伝来と長崎)の諸氏の研究・考察が披露されている。

読んでいるうちに、旧制中学の時代に「幾何」という授業があったことを思い出した。計算をせずに、定規やコンパスだけで線分や角を分割できるので、数字嫌いの私には楽しかった。「幾何」は昔は「用器画」と呼ばれ、イチョウの精子発見の平瀬作五郎氏は、その教科書を著している。戦後の新学制時代には「図形」という科目が残っていたが、いつの間にか「算数」の中に取り込まれてしまった。

築城技術から受け継がれた様々な製図器具が用

途別に分化し、次第に精密化して行く過程で、長距離測量に必要な望遠鏡用レンズが求められ、レンズ研磨用の定規まで用意されている。これによって地球の大きさが測量され、メートル法の根拠が与えられた。一方、これらの技術の維持・伝承には、それぞれの職業のギルドが重要な役割を演じ、各国のアカデミーの活動が、国際的な知識の交流・普及に貢献しているとのこと。とくにレンズ制作技術の発達で、天文学の発展をうながし、ルネッサンスを演出した「科学」の武器となったという。

クロノメータと顕微鏡については、本書では触れられていない。正確なクロノメータの開発は、地球規模から宇宙規模の現象認識に不可欠なものだが、これを論ずるには、別な一冊が必要だろう。また、望遠鏡用の大口径・長焦点レンズと顕微鏡用の小型・短焦点レンズでは、技術的な問題を一緒に扱うのは難しいのかも知れない。日本の鎖国期にもたらされた望遠鏡が、レンズの制作技術を日本にも定着させ、御用眼鏡師という職業を長崎で産み、輸出までされたことを跡づけている。

知らないことばかりの話なので、読むとなにか得をしたような気分になる。

(金井弘夫 H. KANAI)

□Peter Crane(著)：矢野真千子(訳)、長田敏行(監)：イチョウ 奇跡の2億年史 生き残った最古の樹木の物語 B5. 439 pp. 2014. 河出書房新社. ¥3,500 + 税. ISBN 978-4-309-25302-2.

原本はP. Crane: Ginkgo. Yale University Press (2013) ISBN 978-0-300-21382-9.

イチョウは日本のどこにでも見られるごく普通の樹木だから、目に入っても特別なものとは思わない。しかしイチョウは日本に古来自生していたものではなく、中国が原産と言われている。その祖先と思われる化石は、ジュラ紀(約2億年前)にはじまり、地質時代を通じて地球上のあちこちで大繁殖したあぐく、世界のどこからも姿を消したが、中国奥地(どこかは不明)で辛うじて生き残り、その後各地で植栽されたと見られる。日本では中国からタネが持ち込まれ、風土に合ったために全国的に広がったとされる。ヨーロッパへはケンペルによって紹介され、やがて栽培も行われるようになり、ここでも育て易さの故に、そして変わった葉形と樹形の美しさの故に各国、そ

してアメリカ大陸にも拡がり、街路樹としても利用されている。

内容は高度なものだが、監修者もイチョウについての一般向けの本を書く人である上、著者とも顔見知りなので、語り口が自然で分かり易い。イチョウばかりでなく、古植物学や地球の歴史一般についての知識を身につけるのに有用である。

ただ一つ困ったのは、「花粉錐」という用語が頻繁に現れることだ。巻末の索引によると **pollen cone** で、ページにして14箇所もあるが、当たり前の用語らしく、説明がない。岩波生物学辞典には載っていない。花粉関係の書物や用語集関係は身辺整理で送り出してしまったので、手元にない。学生さんにインターネット検索してもらったら「花粉錐」より先に「花粉錘」という単語が出てきた。インターネット検索は便利ではあるが、引用はしたくない。原文では「若葉が出るのと同時に、短枝上に小さな円錐状のものが出来て、その中で花粉が作られる」とある。この「小さな円錐状のもの」は、雄花序そのものを指すように思う。原本によれば、**pollen cone** の出典は Liu X. Q., Li C. S. and Wang. Y. E.: Bot. J. Linn. Soc. **152**: 133–144 (2006) なので、そちらをチェックしてもらったら、10頁ばかりの中国の白亜紀の *Ginkgo* についての論文だった。ここでも **pollen cone** は、雄花穂のごく若く短い段階でも、大きく伸びた段階でも気軽に使われていて、便利な表現ではあるが、特別な名前を与えねばならぬようなものとは思えない。私には「**pollen cone**」は「雄花穂」で十分で、次の学術用語集検討の際、新たな用語として採択する必要はないと思う。

(金井弘夫 H. KANAI)

□ Singhadurbar Vaidyakhana Vikas Samti: Chandranighantu Volume II A4. 416 pp. 2013. Rs. 2,500 (Nepal Rupee). ISBN 978-9937-2-6903-2.

本誌 89 巻 1 号で紹介したネパール本草図譜の続編で、内容の詳細はそちらを参照されたい。こんなに早く続編が出るとは思わなかった。第一巻もそうだが、刊行年が実際より2年も遡っているのは、予算執行との兼ね合いなのだろう。スタイルは前巻と同じで、本来表裏になっていた文字頁と図頁に、生薬学的な記述を含むネ文英文混合の約2頁が、加えられている。

印刷の出来ばえについては、Vol. I と比べてやや見劣りがする。原本は襖紙のような厚さの紙を綴じたものなので、綴じ目に近い側の映像が、ゆがんだり薄かったりする (p. 134, 150, 177, 216, 236, 289, 308, 320, 340, 349, 352, 366) のはやむを得ないが、色版のズレや、バランスが悪くて夕日が当たっているような絵になったり (p. 115, 119, 123, 135, 139, 241), 文字が二重に見えたりする (p. 320, 336) ところがある。印刷の際に、著者側の監督が行き届かなかった感じがする。Vol. I では、前記のような欠点は気付かなかった。この調子で進行するのなら、全10巻の撮影は既に終わっているのかも知れないが、細心な点検が必要だろう。

The 2nd volume of Chandranighantu, an illustrated Nepalese herbal encyclopedia, introduced in this journal **89**(1): 56–58 (2014). Unusual color balance is detected in a few cases requiring careful check. This book is available only from the government office noted in the previous number, not from bookshop.

(金井弘夫 H. KANAI)

## 91 巻 2 号 正誤 (2016) Errata in Vol. 91 No. 2 (2016)

ページ (Page)	カラム (Column)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
105	Author name	↓ 5	Mahoro SUZUKI	Suzuki MAHORO